

寺田寅彦

化け物の進化



化け物の進化

人間文化の進歩の道程において発明され創作されたい
ろいろの作品の中でも「化け物」などは最もすぐれた傑
作と言わなければなるまい。化け物もやはり人間と自然
の接触から生まれた正嫡子であって、その出入する世界
は一面には宗教の世界であり、また一面には科学の世界
である。同時にまた芸術の世界でもある。

いかなる宗教でもその教典の中に「化け物」の活躍し
ないものはあるまい。化け物なしにはおそらく宗教なる
ものは成立しないであろう。もっとも時代の推移に応じ

て化け物の表象は変化するであろうが、その心的内容においてには永久に同一であるべきだと思われる。

昔の人は多くの自然界の不可解な現象を化け物の所業として説明した。やはり一種の作業仮説である。雷電の現象は虎とらの皮のふんどし禪ぜんを着けた鬼の悪ふざけとして説明されたが、今日では空中電気と称する怪物の活動だと言われている。空中電気というところわかったような顔をする人は多いがしかし雨滴の生成分裂によっていかに電気の分離蓄積が起こり、いかにして放電が起こるかは専門家にもまだよくはわからない。今年のグラスゴウの科学者の

大会でシンプソンとウイルソンと二人の学者が大議論をやったそうであるが、これはまさにこの化け物の正体に関する問題についてであつた。結局はただ昔の化け物が名前と姿を変えただけの事である。

自然界の不思議さは原始人類にとつても、二十世紀の科学者にとつても同じくらいに不思議である。その不思議を昔われらの先祖が化け物へ帰納したのを、今の科学者は分子原子電子へ持つて行くだけの事である。昔の人でもおそらく当時彼らの身の辺の石器土器を「見る」と同じ意味で化け物を見たものはあるまい。それと同じよう

にいかなる科学者でもまだ天秤てんびんや試験管を「見る」ように原子や電子を見た人はないのである。それで、もし昔の化け物が実在でないとすれば今の電子や原子も実在ではなくて結局一種の化け物であると言われる。原子電子の存在を仮定する事によって物理界の現象が遺憾なく説明し得られるからこれらが物理的実在であると主張するならば、雷神の存在を仮定する事によって雷電風雨の現象を説明するのとどこがちがうかという疑問が出るであろう。もっとも、これには明らかな相違の点がある事はここで改まって言うまでもないが、しかしまた共通なと

ころもかなりにある事は争われぬ。ともかくもこの二つのものの比較はわれわれの科学なるものの本質に関する省察の一つの方面を示唆する。

雷電の怪物が分解して一半は科学のほうへ入り一半は宗教のほうへ走って行った。すべての怪異も同様である。前者は集積し凝縮し電子となりプロトーンとなり、後者は一つにかたまり合って全能の神様になり天地の大道となった。そうして両者ともに人間の創作であり芸術である。流派がちがうだけである。

それゆえに化け物の歴史は人間文化の一面の歴史であ

り、時と場所との環境の変化がこれに如実に反映している。鎌倉時代の化け物と江戸時代の化け物を比較し、江戸の化け物とロンドンの化け物を比較してみればこの事はよくわかる。

前年だれか八頭の大蛇だいじやとヒドラのお化けとを比較した人があった。近ごろにはインドのヴィシヌとギリシアのポセイドンの関係を論じている学者もある。またガニミード神話の反映をガンダラのある彫刻に求めたある学者の考えでは、鷲わしがガルダに化けた事になっている。そしておもしろい事にはその彫刻に現わされたガルダの顔か

たちが、わが国の天狗大和尚てんぐだいおしょうの顔によほど似たところが
あり、また一方ではジャヴァのある魔神によく似ている。
またわれわれの子供の時からおなじみの「赤鬼」の顔が
ジャヴァ、インド、東トルキスタンからギリシアへかけ
て、いろいろの名前と表情とをもつて横行している。
また大江山おおえやまの酒顛童子しゅてんどうじの話とよく似た話がシナにもある
そうであるが、またこの話はユリシースのサイクロップ
ス退治の話とよほど似たところがある。のみならずこの
シユテンドウシがアラビアから来たマレイ語で「恐ろし
き悪魔」という意味の言葉に似ており、もう一つ脱線す

ると源頼光の音読がヘラクレスとどこか似通つてたり、もちろん暗合として一笑に付すればそれまでであるが、さればと言つて暗合であるという科学的証明もむつかしいような事例はいくらでもある。ともかくも世界じゆうの化け物たちの系図調べをする事によつて古代民族間の交渉を探知する一つの手掛かりとなりうる事はむしろ既知の事実である。そうして言論や文字や美術品を手掛かりとするこれと同様な研究よりもいっそう有力でありうる見込みがある。なぜかと言えば各民族の化け物にはその民族の宗教と科学と芸術とが総合されているから

である。

しかし不幸にして科学が進歩するとともに科学というものものの真価が誤解され、買いかぶられた結果として、化け物に対する世人の興味が不正当に希薄になった、今どき本気になって化け物の研究でも始めようという人はかなり気が引けるであろうと思う時代の形勢である。

全くこのごろは化け物どもがあまりにいなくなり過ぎた感がある。今の子供らがおとぎ話こっけいみの中の化け物に対する感じはほとんどただ空想的な滑稽味こっけいみあるいは怪奇味だけであって、われわれの子供時代に感じさせられたよう

に頭の頂上から足の爪先つまさきまで突き抜けるような鋭い神秘の感じはなくなったらしく見える。これはいったいどちらが子供らにとって幸福であるか、どちらが子供らの教育上有利であるか、これも存外多くの学校の先生の信ずるごとくに簡単な問題ではないかもしれない。西洋のおとぎ話に「ゾツとする」とはどんな事か知りたいというばかりがあつてわざわざ化け物屋敷へ探険に出かける話があるが、あの話を聞いてあの豪傑をうらやましいと感ずべきか、あるいはかわいそうと感ずべきか、これも疑問である。ともかくも「ゾツとする事」を知らないよう

な豪傑が、かりに科学者になつたとしたら、まずあまりたいした仕事はできそうにも思われぬ。

しあわせな事にわれわれの少年時代の田舎いなかにはまだまだ化け物がたくさんに生き残っていて、そしてそのおかげでわれわれは充分な「化け物教育」を受けられる事ができたのである。郷里の家の長屋に重兵衛じゅうべえさんという老人がいて、毎晩ばん酌しやくの肴さかなに近所の子供らを膳ぜんの向かいにすわらせて、生なまのんにくをぼりぼりかじりながらうまそうに熱い杯をなめては数限りもない化け物の話をして聞かせた。思うにこの老人は一千一夜物語の著者のごとき

創作的天才であつたらしい。そうして伝説の化け物新作の化け物どもを随意に眼前におどらせた。われわれの臆おくびよう病なる小さな心臓は老人の意のままに高く低く鼓動した。夜ふけて帰るおのおの家路には木の陰、川の岸、路地の奥の至るところにさまざまな化け物の幻影が待ち伏せて動いていた。化け物は実際に当時のわれわれの世界にのびのびと生活していたのである。中学時代になつてもまだわれわれと化け物との交渉は続いていた。友人で禿はげのNというのが化け物の作家として衆にひいでていた。彼は近所のあらゆる曲がり角かどや芝地や、橋のたも

とや、大樹のこずえやに一つずつきわめて格好な妖怪ようかいを
 創造して配置した。たとえば「三角芝さんかくしばの足舐あしねぶり」とか「T
 橋うでまのたもとの腕真砂さざこ」などという類である。前者は川沿
 いのある芝地からかぜを空風の吹く夜中に通っていると、何者か
 が来て不意にべろりと足をなめる、すると急に発熱して
 三日のうちに死ぬかもしれないという。後者は、城山の
 ふもとの橋のたもとに人の腕うでが真砂まざこのように一面に散布
 していて、通行人の裾すそを引き止め足をつかんで歩かせな
 い、これに会うとたいていはその場で死ぬというのであ
 る。もちろんもう「中学教育」を受けているそのころの

われわれはだれもそれらの化け物をわれわれの五官に触れうべき物理的実在としては信じなかつた。それにかかわらずこの作家Nの芸術的に描き出した立派な妖怪の「詩」はわれわれのうら若い頭に何かしら神秘的な雰囲気のようなものを吹き込んだ、あるいは神秘的な存在、不可思議な世界への憧憬どうけいに似たものを鼓吹したように思われる。日常茶飯の世界のあなたに、常識では測り知り難い世界がありはしないかと思う事だけでも、その心は知らず知らず自然の表面の諸相の奥に隠れたある物への省察へ導かれるのである。

このような化け物教育は、少年時代のわれわれの科学知識に対する興味を阻害しなかつたのみならず、かえつてむしろますますそれを鼓舞したようにも思われる。これは一見奇妙なようではあるが、よく考えてみるとむしろ当然な事でもある。皮肉なようであるがわれわれにほんとうの科学教育を与えたものは、数々の立派な中等教科書よりは、むしろ長屋の重兵衛さんと友人のNであつたかもしれない。これは必ずしも無用の変痴奇論へんちきろんではない。

不幸にして科学の中等教科書は往々にしてそれ自身の

本来の目的を裏切って被教育者の中に芽ばえつつある科学者の胚芽はいがを殺す場合がありはしないかと思われる。実は非常に不可思議で、だれにもほんとうにはわからない事をきわめてわかり切った平凡な事のようにあまりに簡単に説明して、それでそれ以上にはなんの疑問もないかのようにすっかり安心させてしまうような傾きがありはしないか。そういう科学教育が普遍となりすべての生徒がそれをそのまま素直に受け入れたとしたら、世界の科学はおそらくそれきり進歩を止めてしまうに相違ない。

通俗科学などと称するものがやはり同様である。「科

学ファン」を喜ばすだけであって、ほんとうの科学者を培養するものとしては、どれだけの効果がはたしてその弊害を償いうるか問題である。特にそれが科学者としての体験を持たないほんとうのジャーナリストの手によって行なわれる場合にはなおさらの考えものである。

こういう皮相的はこね科学教育が普及した結果として、あらゆる化け物どもは箱根はこねはもちろん日本の国境から追放された。あらゆる化け物に関する貴重な「事実」をすべて迷信という言葉で抹殺まつさつする事がすなわち科学の目的であり手がらでもあるかのような誤解を生ずるようになって

た。これこそ「科学に対する迷信」でなくて何であろう。科学の目的は実に化け物を捜し出す事なのである。この世界がいかに多くの化け物によって満たされているかを教える事である。

昔の化け物は昔の人にはちゃんとした事実であったのである。一世紀以前の科学者に事実であった事がらが今では事実でなくなつた例はいくらもある。たとえば電氣や光熱や物質に関するわれわれの考えでも昔と今とはまるで変わったと言ってもよい。しかし昔の学者の信じた事實は昔の学者にはやはり事実であつたのである。神鳴

りの正体を鬼だと思った先祖を笑う科学者が、百年後の科学者に同じように笑われないとだれが保証しうるであろう。

古人の書き残した多くの化け物の記録は、昔の人に不思議と思われた事実の記録と見る事ができる。今日の意味での科学的事実では到底有り得ない事はもちろんであるが、しかしそれらの記録の中から今日の科学的事実を掘り出しうる見込みのある事はたしかである。

そのような化け物の一例として私は前に「提馬風たいばふう」のお化けの正体を論じた事がある。その後私に私の問題とな

った他の例は「鎌鼬かまいたち」と称する化け物の事である。

鎌鼬の事はいろいろの書物にあるが、「伽婢子おとぎばうこ」という書物によると、関東地方にこの現象が多いらしい、旋風が吹きおこつて「通行人の身にもものあらくあたれば股もものあたり縦さまにさけて、剃刀かみそりにて切りたるごとく口ひらけ、しかも痛みはなはだしくもなし、また血は少しもいわず、うんぬん」とあり、また名字正しき侍にはこの害なく卑賤ひせんの者は金持ちでもあてられるなどと書いてある。ここにも時代の反映が出ていておもしろい。雲萍うんぴよう雑誌ざっしには「西国方さいこくがたに風鎌かざがまというものあり」としてある。

この現象については先年わが国のある學術雜誌で氣象学上から論じた人があつて、その所説によると旋風の中では氣圧がはなはだしく低下するため皮膚が裂けるのであろうと説明してあつたように記憶するが、この説は物理学者には少しふに落ちない。たとえばかなり真空になつてもゴム球が膀胱ほうこうか何かのように脚部の破裂する事はありそうもない。これは明らかに強風のために途上の木竹片あるいは砂粒のごときものが高速度で衝突するため皮膚が截断せつだんされるのである。旋風内の最高風速はよくはわからないが毎秒七八十メートルを越える事も珍しくは

ないらしい。弾丸の速度に比べれば問題にならぬが、おもちやの弓で射た矢よりは速いかもしれない。数年前アメリカの気象学雑誌に出ていた一例によると、麦わらの莖が大旋風に吹きつけられて堅い板戸に突きささって、ちようど矢の立ったようになつたのが写真で示されていた。麦わらが板戸に穿入せんに入するくらいなら、竹片が人間の肉を破つてもたいして不都合はあるまいと思われる。下賤げせんの者にこの災わざわいが多いというのは統計の結果でもないから問題にならないが、しかし下賤の者の総数が高貴な者の総数より多いとすれば、それだけでもこの事は当

然である。その上にまた下賤のものが脚部を露出して歩く機会が多いとすればなおさらの事である。また関東に特別に旋風が多いかどうかはこれも充分な統計的資料がないからわからないが、小規模のいわゆる「塵旋風」ちりせんふうは武蔵野のような平野に多いらしいから、この事も全く無根ではないかもしれない。

怪異を科学的に説明する事に対して反感をいだく人もあるようである。それはせつかくの神秘なものを浅薄なる唯物論者の土足に踏みにじられるといったような不快を感じるからであるらしい。しかしそれは僻見へきけんであり誤

解である。いわゆる科学的説明が一通りできたとしても
 実はその現象の神秘は少しも減じないばかりでなくむし
 ろますます深刻になるだけの事である。たとえば鎌鼬^{かまいたち}
 の現象がかりに前記のような事であるとすれば、ほん
 うの科学的研究は実はそこから始まるので、前に述べた
 事はただ問題の^{フォーミュレーション}構成^{ソリユーション}であって解決^{ソリユーション}ではない。
 またこの現象が多くの実験的数理的研究によって、いく
 らか詳しくわかったとしたところで、それからさきの問
 題は無限である。そうして何の何某が何日にどこでこれ
 に遭遇するかを予言する事はいかなる科学者にも永久に

不可能である。これをなしうるものは「神様」だけである。

「鸚鵡石おうむいし

」という不思議な現象の記事を、

輜軒ゆうけん小録しょうろく、

提醒紀談ていせいきだん、

笈埃きゆうあい随筆等ずいひつで散見する。これは山腹に露出

した平滑な岩盤が適当な場所から発する音波を反響させ

るのだという事は今日では小学児童にでもわかる事であ

る。岩面に草木があつては音波を擾乱じょうらんするから反響が

充分でなくなる事も多くの物理学生には明らかである。

しかしこれらの記録中でおもしろいと思わるるものは、あ

る書では笛の音がよく反響しないとあり、他書には鉦鼓かね

鈴のごときものがよく響かないとある事である。笈埃随筆では「この地は神跡だから仏具を忌むので、それや鈴は響かぬ」という説に対し、そんなばかな事はないと抗弁し「それならば念仏や題目を唱えても反響しないはずなのに、反響するではないか」などという議論があり、結局五行説ごぎようせつか何かへ持つて行つて無理に故事つけているところがおもしろい。五行説は物理学の卵であるとも言われる。これについて思い出すのは十余年前の夏大島三原火山を調べるために、あの火口原の一隅いちぐうに数日間のテント生活をした事がある。風のない穏やかなある

日あの火口丘の頂に立って大きな声を立てると前面の火口壁から非常に明瞭な反響が聞こえた。おもしろいので試みにアー、イー、ウー、エー、オーと五つの母音を交互に出してみると、ア、オなどは強く反響するのにイヤエは弱く短くしか反響しない。これはたぶんあとの母音は振動数の多い上音オバートーンに富むため、またそういう上音オバートーンはその波長の短いために吸収分散が多く結局全体としての反響の度が弱くなるからではないかと考えてみた事がある。ともかくもこの事と、鸚鵡石で鉦や鈴や調子の高い笛の音の反響しないという記事とは相照応する点があ

る。しかしこれも本式に研究してみなければよくはわからない。

近ごろは海の深さを測定するために高周波の音波を船底から海水中に送り、それが海底で反響するのを利用する事が実行されるようになった。これを研究した学者たちだが、どの程度まで上記の問題に立ち入ったか私は知らない。しかしこの鸚鵡石で問題になった事はこの場合当面の問題となって再燃しなければならないのである。伊勢の鸚鵡石にしても今の物理学者が実地に出張して研究しようと思えばいくらでも研究する問題はある。そして

その結果はたとえば大講堂や劇場の設計などに何かの有
益な応用を見いだすに相違ない。

余談ではあるが、二十年ほど前にアメリカの役者が来
て、たしか歌舞伎座であつたかと思うが、「リップ・ヴ
アン・ウインクル」の芝居をした事がある。山の中でリ
ップ・ヴァン・ウインクルが元気よく自分の名を叫ぶ
と、反響がおおぜいの声として「リーツウ・ウアーン・
ウィーンウール」と調子の低い空虚な気味の悪い声であ
ざけるように答えるのが、いかにも真に迫っておもしろ
かったのを記憶する。これは前述のような理由で音声の

音色が変わる事と、反射面に段階のあるために音が引き延ばされまた幾人もの声になって聞こえる事と、この二つの要素がちやんとつかまれているからである。思うにこの役者は「木魂こだま」のお化けをかなり深く研究したに相違ないのである。

「伽婢子おとぎばうこ」巻の十二に「大石相戦おおいしあいたたこう」と題して、上杉謙信の春日山の城で大石が二つある日の夕方しきりにおどり動いて相衝突し夜半過ぎまでけんかをして結局互いに砕けてしまった。それからまもなく謙信が病死したとある。これももちろんあまり当てにならない話であるが、

しかし作りごとにしてもなんらかの自然現象から暗示された作りごとであるかもしれない。私の調べたところでは、北陸道^{ほくりくどう}一帯にかけて昔も今も山くずれ地すべりの現象が特に著しい。これについては故神保博士^{じんぼ}その他の詳しい調査もあり、今でも時々新聞で報道される。地すべりの或るものでは地盤の運動は割合に緩徐で、すべっている地盤の上に建った家などぐらぐらしながらもそのまままで運ばれて行く場合もある。従って岩などもぐらぐら動き、また互いに衝突しながら全体として移動する事もありそうである。そういう実際の現象から「石と石がけ

んかする」というアイデアが生まれたかもしれないと思われる。それで、もし、この謙信居城の地の地すべりに関する史料を搜索して何か獲物でも見つければ少しは話が物になるが、今のところではただの空想に過ぎない。しかしこの話がともかくもそういう学問上の問題の導火線となりうる事だけは事実である。

地変に関係のある怪異では空中から毛の降る現象がある。これについては古来記録が少なくない。これは多くの場合にたぶん「火山毛」すなわち「ペレ女神の髪の毛」と称するものに相違ない。江戸でも慶長寛永寛政文政の

ころの記録がある。耽奇漫録たんきまんろくによると文政七年の秋降つたものは、長さの長いのは一尺七寸もあつたとある。この前後伊豆大島火山が活動していた事が記録されているが、この時ちょうど江戸近くを通つた台風のためにぐあいよく大島の空から江戸の空へ運ばれて来て落下したものだという事がわかる。従つてそれから判断してその日の低気圧の進路のおおよその見当をつける事が可能になるのである。

気象に關係のありそうなのでは「たぬきの腹鼓」がある。この現象は現代の東京にもまだあるかもしれないが

たぶんは他の二十世紀文化の物音に圧倒されているためにだれも注意しなくなっただのであるろうと思う。ともかくも気温や風の特異な垂直分布による音響の異常伝播でんぱと関係のある怪異であろうと想像される。今では遠い停車場の機関車の出し入れの音が時として非常に間近く聞こえるといったような現象と姿を変えて注意されるようになった。ためきもだいぶモダン化したのである。このような現象でも精細な記録を作って研究すれば気象学上に有益な貢献をする事も可能であろう。

「天狗」や「河童」の類となると物理学や気象学の範

困からはだいぶ遠ざかるようである。しかし「天狗様のおはやし」などというものはやはり前記の音響異常伝播の一例であるかもしれない。

天狗和尚とジューズの神の鷲との親族関係は前に述べたが、河童や海亀の親類である事は善庵ぜんあん随筆に載っている。「写生図」と記事、また筠庭いんてい雑録にある絵や記載を見ても明らかである。河童の写生図は明らかに亀の主要な特徴を具備しており、その記載には現に「亀のごとく」という文句が四か所もある。そうだとするとこれらの河童捕獲の記事はある年のある月にある沿岸で海亀がとれ

た記録になり、場合によっては海洋学上の貴重な参考資料にならないとは限らない。

ついでながらインドへんの国語で海亀を「カチファ」という。「カツパ」と似ていておもしろい。

もつとも「河童」と称するものは、その実いろいろ雑多な現象の総合とされたものであるらしいから、今日これを論ずる場合にはどうしてもいったんこれをその主要成分に分析して各成分を一々吟味した後、これらがいかに組み合わされているか、また時代により地方によりその結合形式がいかに変化しているかを考究しなければ

ならない。これはなかなか容易でないが、もしできたらかなりおもしろく有益であろうと思う。このような分析によつて若干の化け物の元素を析出すれば、他の化け物はこれらの化け物元素の異なる化合物として説明されな
いとも限らない。CとHとOだけの組み合わせで多数の有機物が出るようなものかもしれない。これも一つの空想である。

要するにあらゆる化け物をいかなる程度まで科学で説明しても化け物は決して退散も消滅もしない。ただ化け物の顔かたちがだんだんにちがったものとなって現われ

るだけである。人間が進化するにつれて、化け物も進化しないわけには行かない。しかしいくら進化しても化け物はやはり化け物である。現在の世界じゅうの科学者らは毎日各自の研究室に閉じこもり懸命にこれらの化け物と相撲を取りその正体を見破ろうと努力している。しかし自然科学界の化け物の数には限りがなくおのおのの化け物の面相にも際限がない。正体と見たは枯れ柳であつてみたり、枯れ柳と思つたのが化け物であつたりするのである。この化け物と科学者の戦いはおそらく永遠に続くであろう。そうしてそうする事によって人間と化

け物とは永遠の進化の道程をたどって行くものと思われ
る。

化け物がないと思うのはかえってほんとうの迷信であ
る。宇宙は永久に怪異に満ちている。あらゆる科学の書
物は百鬼夜行絵巻物である。それをひもといてその怪異
に戦慄する心持ちがなくなれば、もう科学は死んでしま
うのである。

私は時々ひそかに思う事がある、今の世に最も多く神
秘の世界に出入するものは世間からは物質科学者と呼ば
るる科学研究者ではあるまいか。神秘的あらゆるものは

宗教の領域を去っていつのまにか科学の国に移ってしまったのではあるまいか。

またこんな事を考える、科学教育はやはり昔の化け物教育のごとくすべきものではないか。法律の条文を暗記させるように教え込むべきものではなくて、自然の不思議への憧憬を吹き込む事が第一義ではあるまいか。これには教育者自身が常にこの不思議を体験している事が必要である。既得の知識を繰り返して受け売りするだけでは不十分である。宗教的体験の少ない宗教家の説教で聴衆の中の宗教家を呼びさます事はまれであると同じよう

なものであるまいか。

こんな事を考えるのはあるいは自分の子供の時に受けた「化け物教育」の薬がきき過ぎて、せっかく受けたオースドックスの科学教育を自分の「お化け鏡」の曲面に映して見ているためかもしれない。そうだとすればこの一編は一つの懺悔録のようなものであるかもしれない。これは読者の判断に任せるほかにはない。

伝聞するところによると現代物理学の第一人者であるデンマークのニエルス・ボーアは現代物理学の根本に横たわるある矛盾を論じた際に、この矛盾を解きうるまで

にわれわれ人間の頭はまだ進んでいないだろうという意味の事を言ったそうである。この尊敬すべき大家の謙遜な言葉は今の科学で何事でもわかるはずだと考えるような迷信者に対する箴言しんげんであると同時に、また私のいわゆる「化け物」の存在を許す認容の言葉であるかとも思う。もしそうだとすると長い間封じ込められていた化け物どももこれから公然と大手をふって歩ける事になるのであるが、これもしかし私の疑心暗鬼的の解釈かもしれぬ。識者の啓蒙を待つばかりである。

(昭和四年一月、改造)

日本文学電子図書館

化け物の進化

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第二卷
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第59刷発行



日本文学電子図書館